道成寺伝説の全貌

甲南女子短期大学
国語国文研究部

（一）研究の目的と方法

〔目　的〕

安珍と清姫とにまつわる道成寺伝説は、異常な内容をもつので有名であるが、この伝説には次々と派生したらしい附随説話がからみ、どれが本筋やらわからぬところも多く、更にこの伝説をもとにして作りあげた文芸や芸能殊に芸能の数は非常に多い。

そこで、できるだけ資料を集めて、世にいう「道成寺伝説」の全貌をえがき上げると共に、その構成要素を考察し、後代に数多く作り上げられた文芸、芸能との関係を知りたいというのがこの研究の目的である。

〔方　法〕

それには研究調査の分野を次の三つに分ける。

（イ）伝説としての研究（ロ）道成寺を中心としての実地調査

（ハ）文芸・芸能としての研究

本年度は右のうち（イ）と（ロ）とについて研究調査を行なう。

ここで注意せねばならぬことは、道成寺には昔からの寺伝として、同寺の起りを物語る「宮子姫髪長伝説」というのがあり、これが真の意味の道成寺縁起譚なのであるが、それよりもずっと後代に起った安珍清姫の物語の方が有名で、現に同寺でも「道成寺縁起」と題して、安珍清姫大蛇の物語をえがいた絵巻を用いて絵解きをしているので、この二つの伝説を混同するおそれがある。ここでは髪長伝説には一切手を触れず、専ら安珍清姫の物語を「道成寺伝説」として取り扱うことにする。

「宮子姫髪長伝説」又の名「髪長姫物語」と呼ばれるものは聖武天皇の御生母宮子姫に関する一種の出世物語で、九海士（くあま）の里という所で海中から観世音の像を拾い上げた海女の娘が人一倍髪が長いところから、これが都に知られて后の位にまで出世する。この観世音像をまつるために紀大臣道成に勅命が下り一寺を建立したのが現在の天音山道成寺だという。これは奈良朝の話となっているから醍醐天皇（平安中期）の頃という安珍清姫の物語よりもずっと古く、二つの話の間には何の関係もないわけである。（尤も寺伝では安珍は熊野権現、清姫は観世音の化身ということになっている。）

又、世にひろく知れわたっている道成寺の鐘供養の話は、安珍清

姫の後日譚という位置にあり、謡曲「道成寺」や長唄「京鹿子娘道成寺」その他によって様々な形に作り上げられているが、これは専ら大蛇が鐘を巻いて唖鐘にしてしまったという点をより所にした創作と思われる。それの根拠になった多少の事実があったのかどうか、これらの考察はすべて今回の研究からは除外することにする。

(二) 道成寺伝説の全貌

まず、寺伝その他によって世間に流布せられている安珍清姫の物語を十四項に分けて〔通説〕として掲げ、その部分に関する文献その他の〔資料〕を一々述べ、次にこれらを通じて、伝説の本筋と枝葉とを、総合して〔まとめ〕とすることにする。

(三) 資　料

文献その他の資料として用いたものを次に掲げる。〔　〕内の文字はそれの略号である。

〔験記〕　大日本国法華経験記（平安朝、長久元年、鎮源の著、享保二年刊。必要の部分は広文庫にあり。）

〔今昔〕　今昔物語（平安朝後期の作、巻十四、紀伊国道成寺僧写法花救蛇語、第三）

〔釈書〕　元亨釈書（虎関師錬の著、吉野時代、国史大系、釈安珍の項）

〔謡曲〕　謡曲「道成寺」（観阿弥作という。室町時代）

〔絵詞〕　道成寺絵詞（首尾を欠く。続群書類従、釈家部に在り。室町時代応永七年頃のものか。これと同内容のものを「日高川双紙」或は「賢学双紙」と呼ぶ由、下店静市氏『大和絵史の研究』参照）

〔絵巻〕　道成寺縁起絵巻（道成寺所蔵、室町、応永頃の作かという。国宝）

〔霊記〕　道成寺霊験記（六冊、寛延三年刊）

〔略〕　安珍清姫略物語（文政六年刊）

〔随筆〕　随筆道成寺（津村秀松、昭和十二年刊）

〔叢考〕　叢芋園叢考（芝口常楠、昭和三十六年刊）

〔読本〕　道成寺読本（小野宏海、道成寺護持会発行）

この外、屋代弘賢の「道成寺考」の中に「南紀名勝図絵」その他を引き、弘賢自身の考説もあるが、それらは必要に応じて引くこととする。

○伝説構成の要項

(1) 清姫の生家。　(2) 清姫の身分。　(3) 安珍のこと。　(4) 清姫の恋慕。　(5) 安珍帰路につく。　(6) 清姫安珍を追う。　(7) 切目川と腰かけ石。　(8) 日高川を渡り蛇身となる。　(9) 鐘の中にかくれる。　(10) 安珍を探し出す。　(11) 鐘を巻く。　(12) 清姫の死。　(13) 安珍塚。　(14) 両人成仏する。

○この伝説の特色として注目すべきは次の三つである。

(一) 蛇体と化して異性を追うたこと。

（二）鐘を巻いて愛人を焼き殺したこと。
（三）最後に安珍も清姫も法華経の功徳によって往生すること。

（1）清姫の生家

《通説》 清姫は紀州西牟婁郡真砂という熊野街道の一宿駅の庄屋、清次という人の娘というのが一般の通説である。

《資料》 真砂という土地の名を明らかに出したのは「道成寺絵巻」からであって古い文献によれば単に牟婁郡とあるだけである。即ち安珍がとまったのは〔験記〕では牟婁郡の路辺の宅であり〔今昔〕では「人の屋を借りて宿る」とあり、〔釈書〕では村庄に宿るとしてあり、〔謡曲〕では「荘司がもとを宿坊と定め」と述べている。

▼現在清姫の子孫と称する家が白浜の奥の真砂に三軒ある由。現在真砂という所は大体次の図のような所である。

（2）清姫の身分

《通説》 前項の通り、清姫は真砂の庄司、清次の娘というのが通説だが、若い娘ではなくて寡婦だという説が古く、又、高野辰之博士によって、娘ではない嫁だという説が立てられた。

《資料》 〔験記〕は寡婦とし〔今昔〕では寡婦にして若き女と書き〔釈書〕も寡婦、やもめなどとしている。国宝〔絵巻〕で始めて「清次庄司と申す人の娘」としている。これを従来「娘」と読んで来たが、高野博士は娶と同字で、娶は「めとる」という字だから「嫁」であるといわれた。この国宝絵巻以後は大低「娘」とするようになったのである。〔謡曲〕でも「彼のもの一人の息女をもつ」となっている。又、「清姫」という名は江戸時代の歌舞伎になってから始めてあらわれて来る。

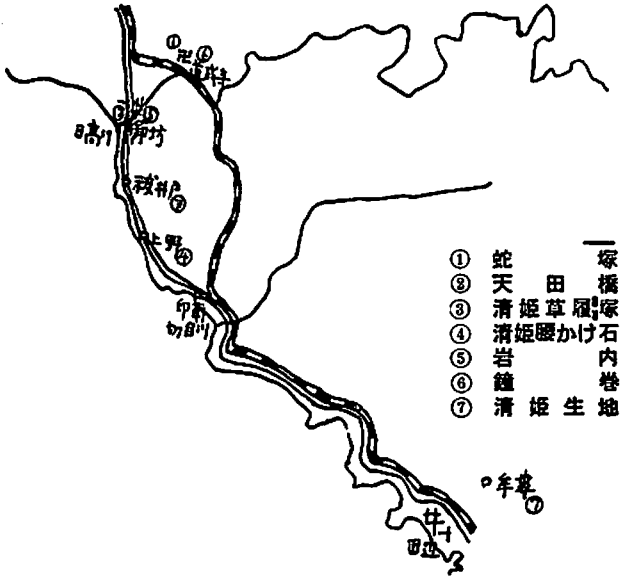
《まとめ》 清姫という名は、父清次の名からとってずっと後代に作り上げられたものらしく、文献的なものにはどこにも見当らない。単に寡婦とか若い女とか、女房とか、或は嫁とかいわれて居る。父の清次という人の名も真砂の庄という地名も恐らく、室町時代のお伽草子あたりで架空的に作り上げられ或は採り上げられたものと見られるのであって、この伝説の最も古い文献である「験記」は牟婁郡の悪女とだけ呼んでいるがこれなどは古い時代の人々の清姫に対する気持を最も明らかに示して居るといってよかろう。とにかく清姫は「寡婦か娘か」という疑問は最後まで残る問題である。

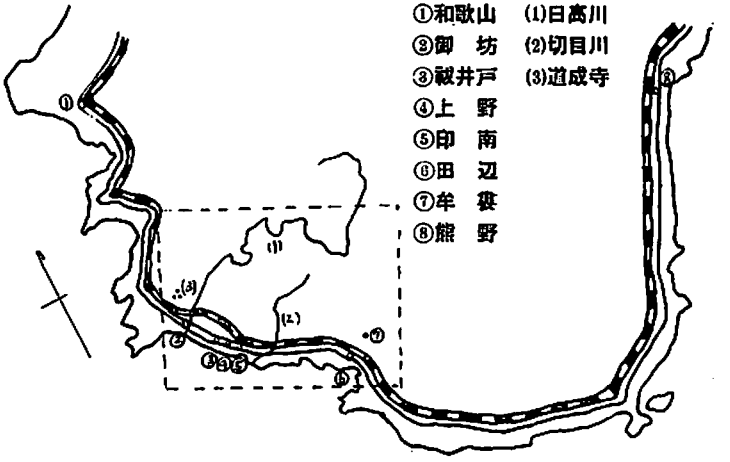
（3）安珍のこと

《通説》 安珍は奥州白河の修験者で、同行の老僧と共に遥々熊野に参拝したということになっている。

《資料》 〔験記〕には「二沙門あり。一人は年若く、その形端正、一人は年老いたり、共に熊野に参る。」〔今昔〕には「今は昔、熊野に参る二人の僧あり、一人は年老いたり、一人は年若くして形貌美麗也。」〔絵巻〕には「醍醐天皇の御宇、延長六年八月の頃、奥州より美目良き僧一人浄衣着たるが熊野参拝するありけり。」〔謡曲〕は単に「奥より熊野へ年詣でする山伏のありしが」〔釈書〕には「釈安珍、鞍馬寺に居る。一比丘と熊野山にまう

道成寺伝説要図


①蛇塚
②天田橋
③清姫草履塚
④清姫腰かけ石
⑤岩内
⑥鐘巻
⑦清姫生地
日高川
御坊
上野
印南
切目川
牟婁
田辺


①和歌山
②御坊
③祓井戸
④上野
⑤印南
⑥田辺
⑦牟婁
⑧熊野
(1)日高川
(2)切目川
(3)道成寺

で……」〔略〕には「奥州白河といふ所に安鎮といへる僧あり、常に三熊野を尊信し、山伏の姿となりて……」とあり。

《まとめ》 僧の名を出したのは〔釈書〕が始めであって、これは安珍としているが〔略〕には安鎮とある。安珍の出身地は大低奥州白河としているが、ひとつ〔釈書〕だけは敝馬寺となって居る。その敝馬寺に行って実地にきいて見たが、管長のお話では、昔安珍が居たらしいが何も証拠が残っていないということである。〔霊記〕の著者は、元亨釈書が最も信頼のおける虎関禅師の著であるし三度も四度も吟味して書かれたのだから、その説を尊ぶべきであるとしている。又、安珍の熊野詣りは一人旅であったか老僧と二人づれであったかという事については、古い方の説、〔験記〕〔今昔〕〔釈書〕に何れも二人連れとあるのを尊重したい。ただ〔絵巻〕では一人旅としているのが注目される。

▼高野博士の説によれば、当時奥州人の熊野参拝するものの数が多かったそうである。又、聞くところによると、現在も福島県白河には、この伝説にもとずいて安珍講といったような団体が結ばれ、安珍の墓もできて居り、年々熊野へ参拝し道成寺に詣り、序でにこの伝説に縁のある附近の遺跡をたずねて帰る人々があるという。

(4) 清姫の恋慕

《通説》 安珍らは熊野へ向う途中、紀州真砂の庄司の家に一宿したが、その夜、庄司の娘清姫は、特に安珍らを厚くもてなし、その上強く恋慕の情を示した。だが、安珍は熊野詣りの身をけがすまいと堅く努めて清姫の強い慕情をしりぞけた。然し清姫の熱情にせまられ、仮りに約束して必ず帰路には立ち寄るであろうと誓って翌朝宿を立った。

《資料》 〔験記〕「その宅のあるじの寡婦、両三女を従者に出し二僧を宿しをらしめ志を労養にいたす。ここに家の女、夜半に若僧のほとりにいたり」……「僧は種々の詞語を以て誘なひ、熊野に参詣することは二三日、灯明御幣を献じ、還向の次、君が情に随はんと約束をなし、偏に此の事を遁る。」〔今昔〕も〔釈書〕も〔絵巻〕も殆どこれと同じである。〔謡曲〕と〔霊記〕とはこれらとは全く違った説話を伝え「十二三ばかりなる娘立ちいでて、これよりいとおとなしやかに挨拶し、」と叙述し、帰路は「安珍ら高野越えにて都へ立ちかへる。」翌年又一泊した時に「庄司の娘清姫は……安珍に別れしより一日片時も忘られず」とあるが、それは翌年の春、安珍らが再び参詣して清姫の家に宿った時、清姫は強く安珍に恋慕するのを、安珍はすかして、帰路に立ちよるよう約束し、五日目には帰るべしと言って立ち出でたからである。

《まとめ》 資料で示したように古い説話は殆ど〔験記〕の記すような状態で一貫しているが、〔謡曲〕では「荘司娘を寵愛のあまりに、あの客僧こそ汝がつまよ夫よなんどと」戯れたとし、〔霊記〕にいたって様々な脚色を加えた説話を伝え、安珍が年々熊野に参拝を重ね、幾度も清次の家に泊り、清姫の二、三才の頃からこれを抱いて愛撫したと云い、清姫の十二、三才の時には安珍は一度高野山

越えの路をとって真砂には立寄らずに京都へ立帰ったとしている。これは元亨釈書の説をうけて安珍を敝馬寺の僧としているからである。その翌年、又、熊野へまいり清姫宅へ一泊したが、今度は帰り途に必ず立寄ることを約束する。こういう話の複雑な組立てはどうしても後世的な特色を示すもので、恐らくお伽草子よりも更に後代の人が作りあげた細工ではなかろうか。

（5）安珍帰路につく

《通説》 安珍は無事に熊野参拝を済ませ、帰りは清姫の宅に立ち寄る考えは毛頭ないので、約束の日をくりあげて、真砂の里をこっそり通り過ぎて、ひたすら帰り路を急いだ。

《資料》 〔験記〕「僧、下向のついでに彼女を恐れて寄らで、忍びて他の道より逃げて過ぎぬ。」〔釈書〕「あかつき更に珍早く道に進みて神祠につくや、即ち帰り、婦が家を経て入らず急に走りて過ぐ。」〔絵巻〕「大方此事思も寄らぬ事なればいよいよ信を致しけり。」〔霊記〕安珍は帰り道を変えて高野山の方面に出ようとしたが同行の僧の意見によって、日どりを早くして真砂の庄をば真夜中頃に通り過ぎ、二日路程逃げのびた。

《まとめ》 安珍が熊野参拝を済ますと急いで帰り路についたわけだが、この事については色々さまざまに述べてあってはっきりしない。たとえば奥州から二人連れで参拝したという説に従えば、帰り道も二人であったわけだし二人とも一人とも書いていないものもあるから、その辺甚だ明らかでない。とにかく帰りの日をきりあげて早くし真夜中に真砂の里をこっそり通過した、というのが一番筋が通っているようである。

（6）清姫安珍を追う

《通説》 それとも知らぬ清姫は安珍を出してやってから、一日として彼を忘れる時とてはなく、指折り数えて、その帰りの日を待っていた。然し約束の当日になっても一向姿を見せぬので、やはり熊野参拝らしい僧の来るのに、これこれの若い僧を見かけなかったかと尋ねると、その僧ならとくの昔に帰路についた筈と知らされ、はっとなって取りのぼせ、怒りと共に見栄も外聞も忘れて、そのまま安珍を追いかけて、街道をば一散に走り出した。

《資料》 〔験記〕によれば、色々の御馳走を用意していたが僧がやって来ない。女は待ちくたびれて道の傍に出て往来の人を見ていた所、熊野から帰ってくる僧があるので尋ねて見た。こういう衣を着た若い僧と老僧とが来るのを見かけませんでしたか。僧が言うには、その二人の僧ならとっくに帰って、もう二、三日は過ぎておりましょう。女はこの事を聞いて手を打って大いに怒り、家に帰って離れ屋に入り、一間にとじこもって音もしない。たちまち五尋の大きな毒蛇となりこの僧を追いかけていった。〔今昔〕「家ニ帰リ室ニコモリ居ヌ。音セズシテ、シバラクアリテ即チ死ス。家ノ従女ラ、コレヲミテ泣キ悲シム程ニ五尋バカリノ毒蛇タチマチ寝室ヨリ出デヌ。」〔釈書〕「乃ち室に入りて出でず、宿を経て蛇となる。長さ二丈余り、宅を出でて道におもむき奔馳して過ぐ。」〔絵巻〕だいたい同じであるが「さてはすかしけり、と怒りて鳥の飛ぶが如く□□□深き遂がもとまでも尋ね行かんず

るものをとて、ひた走りに走りけり。」〔霊記〕ほとんど同じであるが両僧の通過は二日以前の事ならんとしている。

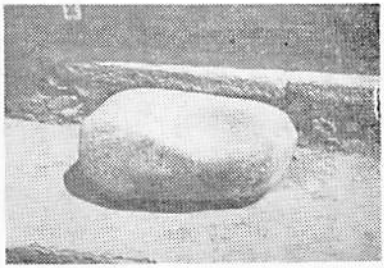
《まとめ》これらの説を取りまとめて見ると、女が僧の帰る日を待って御馳走等の用意をし指おり数えて待ちこがれていた様子は、どの説も同じである。ところが僧は帰って来ないので、熊野からの帰り道にある他の僧に尋ねたところがその答えがまちまちである。一人は七、八丁先と言い、もう一人は十二、三丁先と言い、中には二日路も前であるという答えである。（二日路というのは少し多すぎる気がする。）これを聞いて清姫は大変に怒り、家にとじこもって、たちまち二尋ばかりの毒蛇になって僧達を追いかけたというのが古い伝説で、絵巻以下は、まだ蛇身とならずにいきおい強く追いかけた事になっている。これは大切な注意すべき点である。

（7）切目川、こしかけ石

《通説》清姫は安珍の後を慕って、とうとう切目川まで走りつづけた。折から水かさが増して流れも急であったが、上衣を脱いで川に飛び込みなんなく渡り終り、上野村まで来た時ようやく安珍に追いついた。やれ、嬉しやと呼びかけたが、安珍は一生懸命に、笠も持ち物も投げ捨てて経文を唱えながら力の限り逃げ走った。経文の功力であろうか、清姫の目がくらんで正気を失ったので、しばらく道端の石に腰をかけて息をついだ。そのひまに安珍は一里ばかりも逃げのびて天田川（今の日高川）に走りついた。

《資料》〔験記〕女が大蛇となったのを見て人々が大いに恐れ二人の僧にこの事をつげたので、二人の僧はさだめてこれは女が大蛇となって追うのであろうといっさんにはせて道成寺にいたった、とある。従って道成寺までの間の切目川や日高川の事は、いっさい書いていない。〔今昔〕〔釈書〕も右と全く同じである。〔絵巻〕絵巻物になると切目の五体王子を通りすぎ、上野という所で安珍に追いついて声をかけた事、安珍が一心に経文を念じつつ逃げること、女は首より上が蛇と化して走りつづける所が描かれている。〔霊記〕絵巻とほとんど同じであるが切目川を渡る時に脱いだ上着に指を食い切って、血をもって一香の歌を残したとある。「世を捨てて、うき名をながす切目川、念力ばかりはとうるまじかは。」

《まとめ》注目されるのは切目川、天田川の間で、一旦清姫が安珍に追いついたという事である。初めに真砂の庄で既に蛇身と化したという古い説は別として、人間の姿でなりふりかまわず追いかけた清姫が切目川の急な流れを渡ったのをきっかけとして、追々蛇体に化してゆくわけである。〔霊記〕はこのさかい目にあたる切目川で、清姫が一心こめた心を歌った一首の歌をのべている。さて清姫は上野村で一旦安珍に追いつき声をかけたが、安珍は人違いだと言い張って持ち物を皆投げ出しつ



ついっさんに逃げ走った。この場の姿を描いた絵巻には言葉が書き込んであって、「切目、五体王子」「やや、あの御房に申すべき事あり、見参したるやうに覚え候。いかにいかに、とどまれ、とどまれ。」「ここは上野という所」「ゆめゆめさる事、覚え候はず、人違へにぞ、かくは承はり候らん。」「我はどこまでも、どこまでも、やるまじきものを。」とある。清姫が息苦しさのあまり、目がくらんで腰かけたという「こしかけ石」は現在、上野村の道端に残っており（写真参照）また清姫がかけ登って安珍の姿を求めたという松の木も、この近くの道端に植えつがれてあったそうだが今はない。それに清姫がこのあたりで穿いていた草履を脱ぎ捨てたので、その後に「ぞうり塚」という石碑が建てられ今に残っている。この附近の人達の口碑によると、この辺で早くも清姫の身体は半分、蛇体に化していたと言い伝えられている。

（8）日高川を渡り蛇身となる

《通説》　安珍は逃げて、やがて天田川の岸につき、渡し舟に乗って対岸に渡ったが、この時相当に水かさが多かった。安珍は渡し守に、かようかようの女が来るであろうが決して渡してくれるな、と固く頼んでやがて川にほど近い道成寺へ走り込んだ。ところで清姫は後を追って天田川についたが、大きな川で折からの出水にかち渡りする事が出来ない。見ると渡し舟があるので渡してくれと頼んだが、渡し守は安珍との約束があるのでこれを断った。清姫は右往左往して浅瀬を探していたが、岩内（いわうち）という所で着物を脱ぎ捨て川にざんぶと飛び込んだ。一旦沈んで姿は見えなくなったが、再び浮きあがってきたのを見ると恐ろしい大蛇となって口から炎を吐きながら、なんなく向岸にはいあがり道成寺の方へ向かっていった。

《資料》　〔験記〕〔今昔〕〔釈書〕は前の項で言った通り、日高川の事はいっさい言っていない。〔絵巻〕「此の僧は急ぎ逃げけり。案の如く来て渡せと申しけれども渡さず。その時衣を脱ぎ捨て大毒蛇となりて此河を渡りにけり。舟渡をばちけしと申していわうちにありけると日記にはたしかに見えたり。」とあるが絵巻によればその蛇は一本角をはやした竜の様な形に描いて居り、足は無論ない。そして口から盛んに炎を吐いている。〔霊記〕清姫が天田川に飛び込む前に衣を脱いで柳にかけたとある。そして「十二の角をふりたて、紅の舌を吐き、まなこは光る鏡の如く、口は火炎を吹き出し、」とあるが、道成寺にはいった時の様子をば血目炎口、剱の牙、角は枯木の如くにして、その丈、二丈余り也と形容している。

《まとめ》　日高川を渡る時に清姫が蛇体と化したというのがこの説話の最も中心であり道成寺伝説の山である。ここで道成寺と日高川とが結びついてくる。そして清姫の蛇体が最もあざやかに浮かびあがってくる。清姫が渡ったというのは日高川のどの辺であろうか、絵巻には舟渡しをばチケシと申して岩内にありける、とあるところから、今の岩内であろうという事になるがチケシという地名も明らかでなくさまざまな説を生んでいる。今の岩内という所は、この辺の日高川としては部分的にあまり深くなく最も渡りやすい所であるが、昔と今の移り変わりもあるから一概には言えない。唯この

岩内から眺めると真向いに道成寺が見えるのは大いに参考になる。ここでも亦ふりかえって考えてみなければならないのは、験記を初めとする古い物語には清姫は既に自宅で大蛇と化しているのだが、絵巻以下の物語では徐々に蛇体に近くなり日高川に飛び込んで始めて恐ろしい大蛇となる、という違いで折からの出水といい日高川を舞台とした後の物語の方がはるかに劇的である。なおチケシについては小野宏海氏によれば岩内と書いてチケシと読むとの説であるがまだ問題が残るであろう。

（9）鐘の中に隠れる

《通説》 道成寺に走り込んだ安珍はあわてふためいて僧達にこれこれの事情だから助けてくれと頼みこんだ。寺では誰かの思いつきで鐘楼に鐘を降ろして、その中に安珍を隠し、これでまず安心と思っていた。

《資料》 〔験記〕「諸僧集まり此の事を相談し、大鐘をとって、件の僧を鐘の中に入る。」〔今昔〕「寺の衆僧共衆りて此の事を議し、鐘を取下して、此の若き僧を鐘の中にこめすへて寺の内を閉づ。」〔釈書〕「衆議して、大鐘を下して一堂に置き、珍を鐘の中に納れ、固く堂戸を閉づ。」〔絵詞〕「衆徒は憐れみをたれて大鐘を下し、僧を内にこめ、御堂をたてけり。」〔絵巻〕「その鐘を御堂の内に入れよ。戸をたつべし。」〔霊記〕「道成寺の衆ども評諭未だ終らざるに、日高川にて、彼女大蛇と化すると急に告ぐ。此の事急なればせん方なく、巨鐘を下し堂に置き……彼の法師を助け、鐘の内に僧を入れ、門戸を固く閉ざしたり。」〔鐘事〕「とうとうここまで追いつめられた安珍は寺僧に頼んで、その好意で鐘楼内に深くかくまわれた。」

《まとめ》 通説では寺の僧達が相談して、ふと思いついて、鐘楼の鐘を下してその中にかくまったとあるがこの後先の事は本によって大分まちまちである。第一に折柄、鐘楼の修理中だと云う説がある。絵巻には何の文句も書いて無いが絵巻の絵を見るとそういう仕組みになっている。第二には安珍をかくまった場所、つまり鐘を下した場所は何処であるかと云う問題である。鐘楼の内に下してかくまったと云う説もあれば又、その鐘を寺の建物の中において建物の中にかくしたという説もある。鐘の中にかくそうと云う思いつきについては、事が急でふと思いついたと云うのが多くの説に一貫した言い伝えである。これ等を常識的に解釈して、折柄鐘楼を修理中と云うようになったのは後世の説であろう。とにかくこの点明らかでない。

（10）清姫・安珍をさがす

《通説》 道成寺で安珍を鐘の中へかくすか、かくさない内に恐ろしい物音が山門の下から聞えてきた。見ると清姫の化した大蛇が六十二段の石段を登りつめ、寺に入ると安珍の姿を求めてそちらこちらと追い廻った。

《資料》 〔験記〕「時に大蛇追いて道成寺に来り、堂をめぐる事一、両度、則ち僧戸に至り尾をもって扉を叩く事、数百遍、扉戸を叩き破り、蛇堂の内へ入る。」〔今昔〕「しばらくありて大蛇この寺に追い来りて門を閉ぢたりといへども越えて入りて堂をめぐ

る事一、両度して此の僧を込めたる鐘の戸の許にいたりて、尾を以て扉を叩く事百度ばかり也。遂に扉を叩き破りて蛇入りぬ。」〔釈書〕「すでにして大蛇寺に入る。血目炎口甚だ恐るべし。衆僧走り散ず。蛇堂に赴く。戸開かず。即ち尾を以て戸を打つに、声鉄石の如く、戸ようやく砕け、蛇室に入れば、時に応じて四戸皆開く。」〔絵巻〕説明がない。〔略〕「道成寺に至り、安珍が足跡をかいで、遂に安珍をかくせし釣鐘を見つけて」〔霊記〕「大蛇は程なく寺に入り、血走りたる目、炎をはく口、剣の牙、角は枯木の如くに、その丈、二丈余り、大衆は見るより恐れをなし、皆ちりぢりに走り去る。蛇は堂戸を固く閉ざせるを見て、直に堂に赴けど、元より閉ざし固ければ、開くべくはなし。大蛇は怒れる勢にて尾を上げて関鎖を叩く響きとうめく声、ただ鉄石の如くにて、山もくづるるばかりなり。扉ようやく、くだけたれば大蛇は即ち堂に入る。時に応じて不思議やな、閉ざし固めし堂の内、四面一時に開けたり。」〔随筆〕「大蛇の清姫が鐘を発見した。道成寺の表門、西寄りの高石垣には今も大きなけものの爪あとの様なのが石の面に深く残っている。いよいよ安珍に捨てられたと知ってからは、追い行く道々の重なる憤怒に燃えて火をはく大蛇と化した清姫がこの高石垣から寺内にかけ上った時のその足跡だという。幾つかの大石の面に深くくいこんだ跡が如何にも大蛇の爪跡らしく、見るからになかなか物凄い。清姫がその爪跡を附けた石垣のところまで辿り着くのに、地理の上から観て、後世の考証家達は、清姫が寺近くで、少々路を踏み迷うたかそれとも安珍を探し出すために、殊更、寺の周囲を彷徨うての上の石垣登りだと断定するに相違ない。」

《まとめ》 清姫が大蛇になって道成寺に乗りこむ様子は、本によって若干の違いがありいづれも後から自由な想像を働かして飾りたてた感じがする。先づ門内に入って安珍がどこに隠れたかと探すわけだが、そちらこちらを探しているうちに、御堂の戸が固く閉ざされているのを見て尾を以て扉を叩くと扉の錠前はたちまちくだけて四方の扉が一度にぱっと開いたという事に伝えられている。ところで戸を叩くのに、百度或は数百度という様な表現をしたり、鉄石の様な響きがしたというのは古い記録に見えるところで後世になると六十二段の石段をよじ登ったとか、安珍の足跡をかいだとか、石垣に爪跡を残したとかいろいろつけ加えの伝説がある。ここで誰かが言った様に清姫の蛇体はいわゆる『蛇』であって竜ではないと云う事に注目せねばならない。〔絵巻〕では竜と蛇との混合体に書いてある事からいろいろ変った想像が生れるのであるが、何よりもこの絵を見ても蛇体には足が無い。だから石垣に爪跡を残したというのはどうしてもおかしい。それに足跡をかいだというのは獣ならいざ知らず、大蛇にはこれもおかしい事である。とにかくこの辺自由自在に想像を働かしたものと見える。又、かくれた鐘の下から安珍のはいている草鞋の紐の端が見えていたので、それで、この鐘の下にかくれたことを知ったという説も伝えられているが、これに似た話は他にも少なくないから、やはり俗人の耳に入りやすいための作りごとと思われる。

（11）清姫鐘を巻く

《通説》　清姫は鐘を見つけ、安珍がその中に入っている事に気づき、鐘を巻いて尾を以て叩くと鐘はたちまち湯となった。

《資料》　〔験記〕「大鐘を巻き尾を以て竜頭を叩く事、両三時ばかり。」〔今昔〕験記に全く同じ。〔釈書〕「蛇即ち鐘をとり巻き尾をあげて鐘を叩くに燃えあがり、人近づくべきやうなし。」〔謡曲〕「竜頭をくはへ七まとひまとひ」〔絵詞〕「あまりのかなしさに、古寺のありけるうちへにげ入て見れば、つきかねをおろしおきたる下へいりてかくれけれど、いかにして知りけむ、かねを巻きて……」〔霊記〕「大蛇は鐘を巻き巡り尾をあげて鐘を叩くと見しが、火炎となって燃えあがる。」〔随筆〕「大蛇となった清姫が境内をくまなくさがす内にこれを発見して、鐘のまわりを七巻半も固くまいたものだから、鐘はたちまちとけて、内にいた安珍はそのまま黒こげになってしもうたとあるが、これはもともと大分に掛値のある話だ。第一にいつもつり下げてあるべきはずの鐘が地上に引き下されているのでは、清姫ならずともそこに秘密のひそむ事がすぐさとられる。又寺僧の手で、大鐘が引き下されたとしてもその中に安珍をかくまったのでは、かくまわれた安珍は、そのまま即座に窒息してしまう。いかに無学文盲の山僧達とはいえ、それ程の理屈がわからぬはずはないのだから道成寺でのいきさつは鐘でなく鐘楼の中にかくされていた安珍を清姫が発見してまず安珍を殺し、ついで鐘楼に火をかけ、清姫もなおつづいて猛火の中に飛びこんで自殺をとげた次第だと見るべきであろう。」

《まとめ》　この段は即ち「鐘巻」の状態を述べたものである。大蛇が鐘をまいて尾を上げて鐘を叩くと、鐘はたちまち高熱を発したという点で一致している。其のうち、〔験記〕と〔今昔〕とは竜頭を叩く事二三時ばかりとあるが、その他は唯鐘を叩くといって時間を書いてない。〔謡曲〕と〔略縁起〕とでは七巻まいたとあり〔随筆〕では七巻半とあるがいずれも誇張したものと思われる。又叩かれた鐘がたちまち湯となったという事は〔謡曲〕にも〔略縁起〕にもあり、湯とは鐘がどろどろにとける事であるからこれも大変な誇張である。

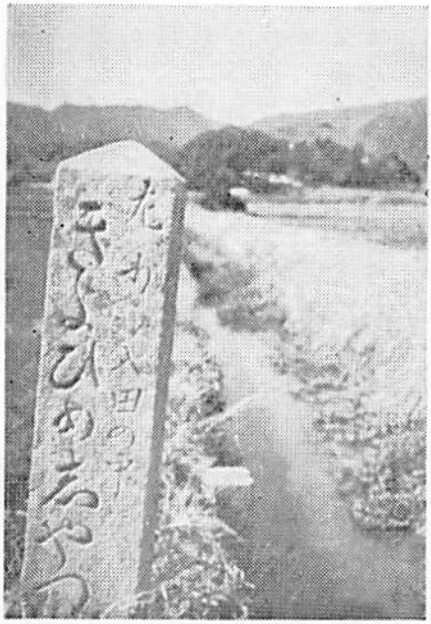
（12）清姫淵に投身する

《通説》　大蛇はやがて鐘から離れて川の方へ這って行ったが精も根もつき果てたのか川の淵にのめりこんで死んでしまった。その淵のあたりに後の人が石碑を建てたが今道成寺の西の田の中にある「蛇塚（じゃつか）」がそれであると伝えられている。俗伝によればこの清姫塚には古くから一本の柊の老木が生えていて、試みにこの柊の葉を一枚とって二つに折るとその折れ目から血の様な赤い汁がにじみ出る。それは清姫の恨みの血潮の幾百年の後までも柊の葉に残っているのだと伝えられている。日高川はその当時には道成寺の直ぐ下を流れていたのだという事である。

《資料》　〔験記〕「堂を出て頸を挙げ舌を動かし本の方を指して走り去る。」〔今昔〕「頸を持ち上げ舌なめずりしてもとの方へ走り去りぬ。」〔釈書〕「時を移して蛇去る」〔絵詞〕「鐘はみじんにくだけて賢学をとりてやがて日高川の深きに入りにけり。」〔絵

巻〕「さて蛇両眼より血の涙を流し頭を高く上げ舌をひろめかし本の方へ帰りぬ。」〔霊記〕「やや時も移りければ大蛇は寺を出で去りぬ。その後かの大蛇は八幡宮と当寺との間に死してあり。即ちその土地へ埋め捨てしより、今に至るまでこの所を蛇塚と云ひ伝ふ。」〔略〕「蛇は即ち道成寺を出でて、入江に沈み死にけり。」

《まとめ》 大蛇が鐘から離れた姿は案外に簡単に伝えられている。その大蛇がどこへ行ったかについては古い伝説では皆もと来た方へ去って行ったとしてある。絵巻も同じ様である。所が道成寺伝説の別伝説とみられる「賢学双紙」（日高川双紙）になると大蛇が日高川の深みに入って見えなくなったと伝えている。それを受けたかの様に〔略縁起〕では入江に沈んで死んだと伝えている。最も修飾の多い〔霊記〕は大蛇が寺の近くの途中で死んでおり、そこにうづめて蛇塚を建てたとしてある。この蛇塚なるものは今も残っている。（写真参照）「随筆」では全てを人間的に解釈して鐘楼の中で安珍も清姫も焼け死んだ無理心中と解釈しているので伝説の節々をばことごとく捨て去ったわけである。



（蛇　塚）前正面向うの木立が蛇塚

（13）安　珍　塚

《通説》 道成寺の僧達はこれ等の恐ろしい出来事に目を見張り、寺の鐘が高熱を発して近よる事が出来ないのでしばらくの間は目を丸くして「あれよあれよ」とたち騒ぐばかり。その中に大蛇は去って行ったが鐘の熱さは仲々静まらないので近寄る事が出来ない。僧達はようやく水をかけて鐘を冷やし鐘をひき倒してみた所が安珍の黒こげの骸骨だけが残っていた。寺ではこれをあつくとむらい今も三重の塔の前に安珍塚が残っている。

《資料》 〔験記〕「諸僧大鐘の蛇毒の為に焼かれ炎火さかんに燃ゆるを見て、あえて近づくべからず。即ち水をくみて大鐘をひたし炎熱を冷す。僧を見るに皆ことごとく焼けつくし骸骨も残さず。わづかに灰塵あるのみ。」〔今昔〕験記と全く同じ。〔釈書〕「寺の衆鐘を倒して中を見れども珍を見ず。又骨もなくただ灰塵のみ。その鐘尚熱くして触るべからず。」〔絵巻〕その時近く寄りて見るに火まだ消えず。水をかけて鐘とり除きてみれば……〔霊記〕「大衆は早く集りて僧は如何なりつらん。中を見んと欲すれ

どもその鐘熱して触るべからず。綱なわ様のものをとり集め手に手に竜頭に引っかけて大鐘を引き倒せば安珍を見ず。骨もなし。ただ灰塵のみありて余炎未だやまざりけり。」

《まとめ》 高熱を発した鐘をようやく冷して皆で鐘を引き倒してみた所は全ての云い伝えが同じであるが、古い伝説をはじめ大概の本では安珍の骨も残っておらずただ灰塵のみとしてある。所が絵巻にだけは安珍の骸骨が墨の様にまっ黒こげになって残っていたとし絵も又、その通りに描いている。通行の伝説としてはこの絵巻の説が有力であるのは当然と云えば当然であろう。安珍を弔った安珍塚について書き残されたものといっては何ひとつない。おそらく寺伝として代々に言い伝えられたものだろう。この安珍塚に対して前の項の蛇塚が清姫塚に当る訳である。

（14）両人成仏する

《通説》 何日かたってこの騒ぎが静まってから道成寺の住職が不思議な夢を見た。二匹の蛇が現われて「自分らは安珍と清姫であるが来世で夫婦とはなったが成仏が出来ずに苦しんでいる。どうか助けて頂きたい。」と云うのである。住職は不憫に思って翌日さっそく寺中の僧を集めて法華経八巻をとなえさせ盛大な法要を営んで安珍と清姫の霊魂をとむらった。その後又住職の夢にきれいな着物を着た天人が二人現われて「自分らは法華経の力によって天上界に生まれ変る事が出来た。」と厚く礼を言って空の彼方へ消えて行った。

《資料》 〔験記〕「数日の時を経て一禅の老僧夢む。先の大蛇直ちに来て老僧に申して曰く『我はこれ鐘の中にこもり居し僧なり。遂に悪女の為に領せられその夫となる。弊悪の身を感じ今苦をのがれんと思へどもわが力及ばず……清浄に法華経如来寿量品を書写し、我等二蛇の為に苦を抜き給へ。妙法の力にあらざればいかでか苦をのがるる事を得んや』蛇この言葉を告げて即ち帰り去る。聖人夢よりさめ即ち道心を発し生死の苦を観じ手づから如来寿量品を写し衣鉢のたくはひを捨て……二蛇の為に苦を抜く。供養既に終りてその夜聖人夢む。一僧一女面貌喜びをふくみ喜色安穏道成寺に来りて心に三宝及び老僧を頂礼し申して曰く『清浄の善により我等二人遠く蛇道を離れ善趣に赴く。女は忉利天に生まれ僧は兜率天に上る』とこの言葉をなし終りて各々相別れ虚空に向いて去る。」〔今昔〕はほとんど験記に同じ。ただしその後に次の様な文が付け加えられている。「新たに蛇身を捨てて天上に生まる事ひとへに法花の力なり。これを見聞く人皆法花を仰ぎ信じて書写し読誦したり……それも前生の善知識のいたす所にこそあらめ。これを思ふに、かの悪女の僧に愛欲を発せることも皆前世の約にこそあらめ。されば女人の悪心のいみじき事すでにかくの如し。これによりて女に近づく事を仏あながちにいましめ給ふ。これを知りてやむべきなりとなむ語り伝へたりとや。」〔釈書〕ほとんど験記に同じ〔日高川双紙〕「此事かくれなかりしかば賢学が弟子共又後にたづね行きて経読み念仏申して跡をとぶらひけり。」〔絵巻〕験記とほとんど同じ。〔霊記〕ほとんど験記と同じであるが最後の所は「その夜脊宿と衆僧同時に夢みらく、一僧一女地を離るる事三尺ばかりにして告げて曰く……」「これ即ち醍醐天皇の御宇延長年間の事なりと、かの寺の縁起に見え

たり。」

《まとめ》　二人が成仏して天上界に生まれる事を得たというのはどの記事にも共通して居り、正にこの伝説の本質が法華経の霊験物語であることを明らかにしている。多少の入れ違いを拾い上げて見ると、第一回に夢見た人が老僧とあって必ずしも住職とはなっていない事。第二の夢が法要のすぐその夜であったり、その後であったりする所、更に夢を見たのが老僧一人であったり、老僧と衆僧と同時であったりする所が、まちまちだがほとんど問題にするに足らないだろう。それよりもこのように異類が経文の力により死後に天上界に生まれ変るというのは仏教伝説のほとんどきまり文句であることを知るべきである。

（四）総まとめ

以上の全貌を一通りながめてみると少くとも三つの大きな疑問があとに残る。

第一は安珍清姫という名前は最初からあったのではなく僧と女という事になっていたのが後になって安珍と清姫となったという事である。

第二はこの話の中で最も大切であるところの女が蛇体に化したというその場所が古い伝説では女の自宅すなわち真砂の里であり、従って道成寺までの長い道のり十六里を蛇体のままで追いかけた事になる。ところが後の絵巻等になると真砂から道成寺へ行く途中の上野村というところから上半身がそろそろ蛇体に変じかけ日高川を渡る時にすごい大蛇になるという風に発展している。蛇体になったのはいったいどこなのであろうかという疑問である。

第三は古い伝説では蛇身となって道成寺へ侵入した事は書いてあるがこれもかんじんな日高川を渡ったという話は全く見えない。その他、色々細かいちがいはあるけれどもまずこの三つが大きな問題である。

この伝説の全貌から見て道成寺という寺の名前を捨てさることが出来ないと同時に、女が蛇体となって男を追いかけたという事、日高川を渡ったという事は、釣鐘を巻いて男を焼殺したという強烈な話と共にこの伝説の骨子であると思う。最後の鐘巻の話はどの資料にもだいたい脱けていないのでこれは問題からはぶくとしても男女の名前、蛇体になった場所日高川の舞台はどうしても考えてみなければならない重要な点である。

まず男女の名前であるが験記には若い僧、寡婦、今昔には年若くして形貌美麗なる僧、寡にして若き女とあるが元亨釈書になってはじめて僧を安珍とし女を寡婦としている。安珍という名は以後ずっと変らないが（時に安鎮としたものもある。）清姫という名はどの書にも見えず江戸時代中期の歌舞伎になって始めて出てくる。清姫という名も真砂の庄司、清次の娘であるところから作りあげたものだろうといわれている。

清姫が蛇体になった場所は古い伝説では真砂の里であるのに後になると日高川に近くなってから、或は日高川を渡る時と変るのであるが、どうしてこういう違いが生じたのであろうか。ここでどうしてもとりあげて考えてみなければならないのはこの伝説における日高川の地位である。これについては元々、日高川とは関係のない蛇

身伝説があったのを紀州に持って来て熊野や道成寺へ結びつける必要上日高川をその結び目としたのだろうという説があるが、その説の良し悪しは別としてここに最も注意を引く事柄はいわゆる「賢学双紙」（一名、日高川双紙）の存在である。これは首尾の文句を欠くものであるが清水寺の賢学という僧が十六才の姫に慕われたのを恐れて老僧と共に熊野詣でをしてさけようとした時姫の執念が、追いかけてくる。古寺の鐘の中にかくれたのを「さながら大蛇となって」鐘を巻いてみじんに打ちこわし、賢学をば日高川の水中に連れ込むという筋で、これが日高川双紙と呼ばれるわけである。こういう物語が室町時代にあって、古い道成寺伝説にこの日高川双紙が入り込んで来て舞台を日高川中心に作り変え発展させたのではないかと推測される。

それ故もともと古い道成寺伝説には日高川という物がなかったのに、元亨釈書の後あたりからすなわち国宝の絵巻あたりから道成寺のすぐ側を流れる日高川が大きな役割を受け持つようになったのではないか。こういう説はすでに誰れかによって語られている。

なお道成寺では、その鐘が鳴鐘となって役に立たなくなったので十数回も鋳直したが成功せず、やっと一つの鐘を作った所が折からの南北朝戦乱のために軍用に使われ、遂には行方不明となったのを、或人が竹林の中から発見し、京都寺町通りの妙満寺に寄贈したという。その鐘は現に妙満寺に残っていて私達も実見して来た。このような話は他にもいろいろあるが道成寺伝説の後日談というべきものだから、この度はすべて省略することにした。（完）

「甲南国文」バックナンバーもくじ（その一）

創刊号

女三の宮の読辭について……三沢諄治郎
敬語と性格表現……岩瀬法雲
—源氏物語から—
「大学」の書の解題……神野忠次
擬音語・擬容語の表現説的考察……山内潤三
方言文法の方向……鍄田良二
鴎外の訳詩—「沙羅の木」素描—……垣田時也

第二号

狂言寸言……前田正民
座談会—卒論をめぐって—
卒業論文要旨

第三号

中世の謎について……三沢諄治郎
文法から文体へ……岩瀬法雲
—源氏物語の敬語について—
国文学と白氏文集……神野忠次
—漱石の作品から—
国語教育における方言の扱いについて……鍄田良二

（第四号以下18・24頁へ）